

# 本證寺本「聖德太子絵伝」における技法研究 及び部分復元模写

安井彩子（愛知県立芸術大学大学院）

仏教信仰の祖ともいえる聖徳太子の生涯を伝記絵とした「聖徳太子絵伝」は、中世の太子信仰の盛り上がりに伴い、多くの掛幅として遺されている。特に浄土真宗の活動が盛んであった三河や北陸にその多くが伝わっており、絵画様式や図像継承について注目されている。

愛知県安城市の本證寺に伝来する重要文化財「聖徳太子絵伝(本證寺蔵)」は、現存する太子絵伝のなかでも最大構成である全十幅の掛幅形式であり、また描写表現や保存状態の良さがうかがえる優品である。本研究では平成24年度に熟観調査が可能であった第八幅より、画面中央に描かれる太子三十八歳の青龍車の場面から、太子三十六歳で小野妹子を衝山へ送る遣隋使船までを選定し復元模写することで、絵画制作者の視点から描法や筆致などの図像解析をし、技法的側面から本證寺本の特徴を精査する。

## 1、第八幅について

太子三十六歳から四十歳までを描いており、画面下から上へと場面展開する。特に画面中央の遣隋使船、青龍車の場面は全体を海、雲、山といった自然景で覆われていて印象的な構成になっている。人物は太子や小野妹子ら貴族のほか、遣隋使、隋からの使者、僧、天人、四天王など幅広いが、絵具の剥落が多いため、相貌のわかる人物は限られている。また画面を縦断する大きな欠損や、全体的に見られる黒点状のシミによって掛幅全体の印象が損なわれており、欠損箇所には補彩を確認できる部分もある。



▲第八幅（本證寺蔵）

## 2、各図像の技法について

### ○太子

第八幅には八人の太子が描かれるが、相貌がはっきりと残る図像は無く、からうじて判別できる図像は二体のみとなる。青龍車の太子は絵具の剥落によりその相貌はわからないが、下書き線の形から小柄で顔も丸みがあるように感じられ、その特徴は先の二体よりも、その周りの天人に近いと考えられる。他幅の太子を見ると、その描き方には共通の形式が

あり、第七幅二十八歳以降の壯年の太子は、黄丹の袍に金の唐草紋様と朱の隈取り、白の袴に朱色の裾、顔は白色で薄紅色の隈取りが入り、口髭と頬鬚がある。場面にもよるが、大抵は白色の笏を持っている。復元摸写ではこれらの形式にならい、また周辺の人物像と違和感のないような図像を目指した。



▲太子（第八幅）

▲太子（第七幅）

▲太子（第八幅、復元）

### ○隋人

遣隋使船に七人と、画面最下段に三人確認でき、遣隋使船に乗る隋人は中央付近、帆の後ろ側に座る人物のみ顔が残っている。人物像は20mm程度しかないので、目や口などは筆先の筆致で表情が感じられるような描き方がされている。二筋の結帶の付いた冠や半臂のようなものをつけた人物も見られるが、これらの特徴は、最下段に通常の大きさで描かれた隋人を参考にすることで復元した。



▲隋人（第八幅）

▲隋人（第八幅、復元）

### ○天人

青龍車の周りを十人の天人が囲み、みな団扇を掲げている。相貌のわかるものは三人で、他はわずかに判断できるか完全に剥落しているかとなっている。丸みのある輪郭に、白目のある大きな目、目鼻などのパーツ同士が近く、隈取りが鮮やかに入っており、八幅の他の場面と比べても特徴的な筆致である。隣の場面になる衝山の人物像や、第二幅の蝦夷人と筆致が近いと感じられたので、相貌復元の参考にした。唐風の装束は形が二種類みられ、先の隋人同様の装束と、袖にフリルのついた装束とあり、十人がそれぞれ異なった配色の衣と袖になっている。朱色の袖に隈取りのような金線の入ったものや、紫色のフリルには同じような白線が入っているのがわかる。ひとつ残った朱色の団扇には金紋様が入っているが、他幅の装束などを見ると金紋様は朱色か丹色に施されているため、緑色や青色の団扇には金以外が使用されている可能性がある。復元では緑の団扇には墨線、青の団扇には白線で紋様を入れた。



▲天人（第八幅）



▲蝦夷人（第二幅）



▲天人（第八幅 復元）

## ○四天王

四天王には守る方角とそれに伴った色が充てられており、持国天（東・緑）、増長天（南・赤）、広目天（西・白）、多聞天（北・青）とされるが、ここに描かれる四天王は配置と肉身の色からは特定できず、曖昧な表現となっている。同場面の天人同様に白目のある大きな目に、顔のパーツが接近して描かれていて特徴的である。緑の肉身の天部は髪を垂らして冠をしており十二天像を彷彿とさせるが、装束は他三体同様の唐風の甲冑のため、復元では武将天部らしく隣の天部をほぼ真似た相貌とし、緑の肉身のため隈は入れないこととした。



▲四天王（第八幅）



▲四天王（第八幅 復元）

## ○青龍

状態が良く細部の描写まで観察でき、特に顔の表現は目を見張るものがある。頭髪には金泥線があり、金の眼球は黒い瞳の周りを白線で括っている。緑色の体躯には所々に青色がさしてあり、鱗の線描の跡もみられる。復元では鱗を描きこむことで龍の描写が引き締まった。



▲青龍（第八幅）



▲青龍（第八幅 復元）

## ○雲

原本は一見黄土色に見えたが、画面を斜めから観察すると雲全体にしっかりと雲母が引いてあることがわかった。また墨線の内側に隈のような白線が残っている箇所があり、当初は雲全体が雲母地に白い線隈で表現されていたと考えられる。復元では雲母4番と2番を混ぜて自然な霧囲気を目指している。



▲雲（第八幅）



▲雲（第八幅 復元）

## ○遣隋使船

二つある帆の片方が大きく欠損しているものの、直線的な部分なので図像復元は比較的容易であった。他作例では船の形が異なり小屋が乗っているものもあったが、朱塗りの対になった帆は描かれており、この帆を描くことが遣隋使船の表現となっているようだ。船体は明るい丹具色と黄味寄りの白群の色彩のぶつかりが鮮やかである。帆の黄味がかった緑色は、黄土に白線を重ねて表現した。



▲遣隋使船（第八幅）



▲遣隋使船（第八幅 復元）

## ○海

緑地の波一つ一つに青色をさすことで前後感を出し、墨線の際をなぞるように白線が見える。海上に浮かぶ遣隋使船と比べて絵具の塗りは薄めで、先に描いた墨線がそのまま生きる表現となっている。海を描いた場面は他に第五幅、第七幅に見られるが、五幅七幅の海には波の一つ一つを絵具で書き分けるような描写は判然とせず、白線描のみが確認できる。



▲海（第八幅）



▲海（第八幅 復元）

### 3、総括

これまでに本證寺本「聖徳太子絵伝」全十幅を一通り熟覧調査する機会が持てた。各幅大きさに多少の違いはあるが、一幅が約 160cm × 95cm とかなり大きいため二幅ずつに分けて調査している。全幅を通して画面全体が強い黄味に経年変化しており、また緑青や群青の剥落跡は絵絹が濃く焼けていたが、檜霞の明るい青色や柔らかな中間色を多用した人物描写によって画面の重さはさほど感じない。特に第八幅は檜霞をまたぐように配された山や丘陵、雲の表現によって各場面が繋がったダイナミックな構成となっており、本證寺本の景観表現の特徴がうかがえる。絹本の特徴として裏彩色技法があげられるが、絵具の状態が最も良好であった第十幅の調査から、彩色はほぼ表彩色のみである印象を受けた。摸写でも絵具をしっかりと塗布しないと顔などの緻密な線描表現ができないかったので、表から絵具を重ねることを意識している。人物や建築物は当たり線で下書きしたのち厚く彩色し、もう一度仕上げの丁寧な線描をしているのに比べて、海や山などの自然景は最初の墨線をそのまま活かして仕上げている。色彩的なバランスだけでなく、このような描法の違いも画面に緩急をつけ、洗練された表現に繋がっていると感じた。また八幅内で人物描写の違いが見られる



▲第八幅（復元）

ことや、復元した天人や四天王に酷似した描法が他幅で確認できることからも、十幅を通して複数人の描き手によって制作されていたと考えられ、工房制作による分業形態を感じることができた。